

「神学入門」 ショート・レクチャー

中野 実

導入：

今年に入り、世界中が新型コロナ・ウイルス拡大の危機の中に放り込まれ、私たちの夜間講座も計画を何度か変更を余儀なくされました。そして結局、2020年度のプログラムをすべて中止するという事態になってしまいました。

新型コロナの影響のもと、まず3月初めに予定されていた春季研修会が延期となり、現在に至るまで未開催のままです。そして4月になり、新年度が始まったものの、一学期のクラスはすべて（来年度へ）延期。とにかく二学期からは始めたいとの願いをもって再開準備を始めていましたが、その願いも叶わず、2020年度内のすべてプログラムを中止するという苦渋の選択をせざるをえなくなりました。

そのような中で、少しでも何かを発信できればというアイデアのもと、スタッフの方々のご協力を得て、「神学入門」という短い講義をオンラインで発信することになりました。本来ならば、年度初めの4月に、その年度の学外活動委員長による入門講座が行われ、その年度の学びの良きウォーミングアップの時間が提供されておりました。通常の時のように、十分な講義を提供することはできないかもしれませんが、少し短めの講義をオンラインで提供させていただきます。しばらくの時、お付き合いいただければ、さいわいです。

本論：

Ⅰ 東京神学大学「夜間講座」の特徴

まず東神大の「夜間講座」の特徴に注目してみたいと思います。

「夜間講座」は、キリスト教神学に関する一般向けの講座ではありません。特に数多くあるカルチャー・センターの一つとは大きく異なります。どう違うのでしょうか。少し考えてみたいと思います。

まずは歴史的な点からです。歴史的に見ると、「夜間講座」は戦後まもなくに創設された、長い伝統をもつ神学の学びの場です。2020年度には74期生を迎えました。つまり、本学の歴史（大学としては1949年よりスタート）と共に（より正確にはその前身の時代から）歩んできた東神大にとってなくてはならない大事なプログラムなのです。ですから、学校としても力を入れ、教授会のメンバーのほとんどが関わってきました。

そもそも東神大は、キリスト教の教会（信仰共同体）を建て、形成するために必要な神学を研究、教育するために建てられた学校です。もっと具体的に言うと、その使命の中心は伝道者を育成し、教会やキリスト教学校などに送り出していく働きです。しかし教会（信仰共同体）を建て、育てるという本学の使命は、いわゆる「教職者」（牧師、教師）を育成ということにとどまらず、「信徒」の方々をも力づけ、育てることも深くつながっているのです。そのような意味で、信徒向けの神学講座である「夜間講座」もまた、東神大の使命のとても重要な部分を担ってきた、と言えるでしょう。

それがこの「夜間講座」が普通のカルチャー・センターとは違う点なのです。もちろん、「夜間

講座」はまだ教会に属していない方々（まだ信徒でない方々）にも門戸を開いてきています。しかしこの神学講座は、どこまでも神学校による、教会（信仰共同体）のための講座なのです。神学校と教会との太いパイプがあって初めて成り立つ神学の学びです。個人的な関心（動機）から参加している場合もちろんあると思います。それはそれで良いのですが、皆さんは学んでいる間に、キリスト神学というのが何よりも先ず教会に仕えるための学問、究極的には、神様に栄光を帰するための学問なのだということに気づかれると思います。この点について、これからお話をしていきたいと思います。

II 「神学」とは何か？「キリスト教神学」とは何か？

現在、世界中が大きな危機のうちにあります。具体的に日常生活が揺らぐような経験をしています。この目の前の危機をどうにかしたい。それが私たちの痛切な願いです。けれども、目の前の危機が過ぎ去れば、それで問題は解決したと言えるのでしょうか。多くの人々はそう考えるかもしれませんが。しかし本当にそうでしょうか。今回の危機を通して、人間、社会、世界が抱えている深い危機の現実も明らかになっているように思います。例えば、今回の危機を通して、人間の中に人を差別したり、人を裁いたりする心が根深く存在している現実が見えてきています。また、このような危機の中で、社会的に弱い者に結局しわ寄せが来るといふ社会の抱えている矛盾の現実も明らかになっているように思います。このような人間、社会が抱えている（社会正義の）問題に加え、病や死の現実と戦うという人間が根源的に抱えている大きな課題にも目が開かれてきます。

たしかに神学という学問は、直接社会制度を変革するために役立つわけではありませんし、また直接病気を治すために役立つわけでもありません。では神学はこのような危機の中でどのような貢献ができるのでしょうか？神学は、目の前に立ち現れてくる様々な危機、課題の根底に存在している、もっと深い本当の危機を取り扱う学問だということです。それは罪と死の問題です。しかもそれを神との関係においてその問題を直視し、その問題の解決への道を示すのが神学という学問なのです。

神学は「世界の謎」と取り組む学問だ、と表現することもできるでしょう。私たちは一体どこから来て、今どこにいて、そしてこれからどこへ向かおうとしているのか？個人の人生の歩みはもちろん、世界の歴史全体が抱えている、そのような謎を扱うのが神学です。すでに述べたように、そのような謎を、世界、宇宙、万物の創造主（creator）にして、守り主(sustainer)であり、救い主(redeemer)であられる神との関わりにおいて、理解しようとするのが、神学です。それによれば、私たち人間は神によって創造された被造物であり、しかも「神のかたち」(Imago Dei) に造られた特別な存在でありながら、その神のかたちを失ってしまった、失われた存在である。それが聖書の語る人間理解です。しかし、そのような失われた存在を見捨てることなく、追い求め、落ち込んでいた穴から私たちを救い出してくださるのが、私たちの創り主であられる神様です。そんな神様の視点をもって世界のすべてを見直そうとするのが、神学の営みです。

けれどもここで注意が必要です。神学は、神様の視点をもって、神様の御心に即して、世界を見直し、理解する学問です。しかし、神学によって私たちはまるで神様のようにすべてを知ることのできる存在になれるということでは全くありません。むしろ正反対です。全知全能の神様の視点で世界を見直す営みは、結局私たち人間は何にも分かっていない、その現実を私たちに突きつけることになるのです。神学は自己実現の学問ではありません。むしろ、何も分かっていない自らを発見

する歩みです。しかし、その事が分かることこそ、重要なのです。神学にとって大事なことは、私たちが自分の知恵によって神を知ることではなく、むしろ、神に知られている事実を目を開かれることです。

例えば、使徒パウロはガラテヤの諸教会に向けてこう言いました。

「だが、今や神を知ったのに、いや、神に知られたのに、どうして、再び奴隷になることを望んで、あの無力で貧弱なもろもろの靈力に逆戻りするのですか」（ガラ 4:9、協会共同訳）。

また、パウロはイスラエルに対する神様の選びの不思議さに目が開かれた時、ローマ教会の人々に向けてこう言いました。

「ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。神の裁きのいかに究め難く、その道のいかにたどり難いことか。誰が主の思いをしっていたであろうか。誰が主の助言者となっただろうか。誰がまず主に与えて、その報いを受けるであろうか。」（ロマ 11:33-5、協会共同訳）。そしてパウロは、人間の無知の現実を指摘しながら、その言葉の最後を神への讃美（頌栄）で締めくくります。「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように、アーメン」（11:36、協会共同訳）。

このように、究極的には、神学という学問は、神に栄光を帰するための学問だということができるでしょう。

III 教会の学問としての神学

以上、述べてきたような神学の歩みは、キリスト教の歴史、キリスト教会の歴史と共になされてきました。限界のある人間の知恵を用いて神の御心がどこにあるかを追い求めつつ、しかしそのような人間の知恵では計り知ることのできない神の働きに圧倒されてしまう。それが神学の歩みだとすると、キリスト教の教会は、そのような神学を 2000 年間にわたって続けてきたということができるでしょう。

もちろん、キリスト教の歴史の中で、突出した優れた神学者が登場することもあります。けれども、それらの神学者もまた神の不思議な御心に圧倒されて、神に栄光を帰することしかできませんでした。さらに言えば、ある特定の神学者によって神学はなされていったというよりも、キリストの教会全体が常に神の御心を追い求めつつ、その不思議な業に驚かされ、世界をその不思議な御心のもとで新しく見直す（自らを省みる）歩みをしてきたのです。そのような意味で、神学は、個人の業（学問的業績）というよりも、教会全体の業、働きです。神学は、教会の学問だと言って間違いはありません。

この点で、神学と宗教学（それと関連する諸分野、歴史学、社会学など）との違いが明らかになります。たとえ同じ対象を研究したとしても、神学研究を行うということは、どこまでもキリスト教の信仰を前提にし、しかも教会の営みとの関わりの中で、教会のためになされるということの意味するのです。

神学は、キリスト教会の 2000 年間の歩みの中で続けられてきました。当然のことながら、キリスト教の在り方、教会の姿はいろいろな時代、いろいろな文化の中で、多様な形をとることになりました。その中で営まれてきた神学も同様です。異なる時代、異なる文化、異なる教会的背景のもとで、多様な神学が生み出されてきたのです。しかし、そのような多様な神学の在り方、その豊かさを大切にしつつも、キリスト教として何が一貫したアイデンティティであり、キリスト教として

どのような独特なエートス（性格、キャラクター）を育て、さらにはどのような独特な倫理を生み出していくのか、という課題と神学は常に取り組んできました。

歴史の中で、キリスト教神学はいろいろな仕方でもなされてきましたが、現代神学においては、大体次のような四つの分野に区分されて、神学という学問が営まれています。

○組織神学（Systematic Theology）

キリスト教信仰の主要なテーマ（内容）を体系的に捉え、同時代に通用する仕方でも提示する学問分野です。さらに細かく教義学、倫理学、弁証学という3領域に分けることもあります。また、宗教哲学的（宗教を哲学的視点で扱う）課題も組織神学と深く関わっています。

○歴史神学（Historical Theology）

簡単に言い換えれば、教会史（Church History）の研究と言えます。古代から、中世、宗教改革、近代を経て、現代へと至る2000年の教会の歴史が研究対象です。しかも教会は、多様な文化圏（中東、ヨーロッパ、北米、アフリカ、中南米、アジア）へ広がり、多様な教派へと展開されていきましたので、世界のキリスト教、諸教派の歴史について学ぶこともこの分野の課題です。それとともに、世界の諸宗教の歴史についても歴史神学が扱うことがあり、その守備範囲はきわめて広いです。

○聖書神学（Biblical Theology）

教会の正典である聖書がいったい何を語っているのか、厳密な学問的手続きをもって明らかにする学問分野です。聖書テキストが生み出されてきた本来の状況、そしてそれに基づく本来の意味を明らかにする釈義（Exegesis）という学問的作業がその中心です。近代になって次第に専門化が進み、旧約聖書神学と新約聖書神学は別々の学問領域へと分かれていきました。それぞれ高い専門性をもった学問領域に発展し、学会も別々に行われることが多くなっています。しかしそのような状況下で、あえて旧・新約全体を貫く「全聖書的神学」を作り出そうという学問的試みも見られます。ここで言う「聖書神学」は方法論的にも内容的にも、いわゆる「聖書学」と同じ学問分野のことです。しかし、あえて「聖書神学」と呼ぶのは、キリスト教神学の一分野としての位置づけを鮮明にしたいからです。「聖書神学」という用語がより限定した意味で用いられ、釈義学から教義学（組織神学）への橋渡しをする学問領域と見なされることもあります。

○実践神学（Practical Theology）

教会（信仰共同体）のさまざまな実践に関する学問分野であり、組織、歴史、聖書の各分野の営みを踏まえながらなされる学問分野です。説教、礼拝学、典礼学、キリスト教教育学、牧会カウンセリングなど多くの学問領域から成り立っています。キリスト教の世界宣教について扱う「宣教学」（Missiology）もこの分野の一部と見なされることもあります。

東京神学大学の神学教育のカリキュラムは、以上のような四つの分野に基づいて構成されています。また「夜間講座」もこの四分野をカバーするクラスを提供しています。このように広く豊かな神学の学びをこれからも提供していきたいと願っています。